

檜枝岐村の平等性と共同性についての考察

1. はじめに

今回、私たちは福島県南会津郡にある檜枝岐村で調査を行った。檜枝岐村には民宿が数多くあり、温泉資源や伝統的な歌舞伎を生かした観光業を行っている。私たちがこの村に興味を持った理由は、新型コロナウイルスの流行時に、檜枝岐村の観光業が大きな打撃を受けなかったという話を聞いたためである。多くの観光地が、コロナ禍で深刻な影響を受けたにもかかわらず、最小限のダメージに抑えることができたのは何故だろうか。私たちは、「競わない」という独自の観光業への取り組み姿勢にあるのではないかと考えた。外部の企業やチェーン店が参入せず、内発的な発展をすることができたため、村独自の魅力が守られ、そこにしかないものを求めて観光客が何度もリピートをするという観光の形ができています。また、檜枝岐村の民宿は連泊を好まず、他の民宿での宿泊を促すそう。これは、利益を追求するような観光の在り方ではできないことである。ほかに、温泉がすべての民宿だけにとどまらず、全家庭に引かれており、村の資源を平等に使っているというのも特徴である。

このように檜枝岐村では、村全体で観光業に取り組んでいるという共同性や平等性の意識がある。私たちは、この意識がどのようなきっかけで生まれ、今日まで守られてきたのか疑問に思い、調査を行うことを決めた。観光業の歩みや、生活の様子などを元に聞き取り調査を行い、考察していく。

2. 調査内容

檜枝岐村の共同性と平等性がどのようにして形成され、守られてきたのかを観光や生活の視点から調査する

3. 行った調査

- 8月20日 檜枝岐村役場での聞き取り調査
- 8月21日 民俗資料館の見学・聞き取り調査
- 8月22日 公民館の見学・聞き取り調査
民宿あづまでの聞き取り調査
- 8月23日 山旅案内所での聞き取り調査
歌舞伎伝承館での聞き取り調査

4. 調査をしてわかったこと

調査前の予想では、檜枝岐村の共同性や平等性は、村で争いごとや経済格差を生まないようにするためにできた意識だと考えていたが、実際は役場が主体になって一斉に観光業

を発展させた結果共同性や平等性が強くなったということが分かった。役場が主体となって観光業に取り組んだ理由には、村の歴史が大きく関係している。

檜枝岐村は、標高 939 メートルで平均気温は 7.7 度という厳しい環境にあり、人口は現在 510 名ほどで、最も多い年でも 1000 人に満たないという小規模な村である。このような寒く厳しい環境のため稲作ができず、蕎麦の栽培や木工業を営み、山菜やサンショウウオなどの資源を利用して細々と生活してきたようだ。しかし、この苦しい生活は 2 つの出来事をきっかけに大きく好転する。一つ目は、昭和 30 年代頃に起こった「尾瀬ブーム」である。檜枝岐村は尾瀬国立公園の福島側の玄関口であり、尾瀬を訪れる観光客の経由地となった。二つ目は、奥只見ダム建設である。1961 年に檜枝岐村と新潟県魚沼市に跨る奥只見ダムが建設された。これにより、檜枝岐村は国有資産等所在市町村交付金として、巨額のお金が村に入るようになった。この二つの出来事が、檜枝岐村の財政を急激に豊かにし、環境を大きく変えたのである。

村では、役場が中心となり新たな収入源として観光業を発展させることに力を入れた。まず、ダムの交付金で上下水道などのインフラを整備した。また、村に流れる川の下流付近で温泉を掘り当て、上下水道を整備すると同時に温泉を全家庭に引くパイプの整備も行った。温泉を全家庭に平等に引くことになったのは、役場が公共整備として行った事業であったため、不平等にはいけないからというのが理由だったのである。

これらの観光業の基盤となるインフラを整えたことで、村の観光地化は大きく進んでいく。役場が民宿をやろうと声をかけたことで、村の民宿の数は増大し、多い時には 50 件程度にもなった。この民宿の経営は、家業として始めたものがほとんどだったため、多くが家族経営である。そのため、規模も小さいものが多い。檜枝岐村の観光が「競わない」という形になったのは、受け入れる民宿自体が家族で対応できる範囲でしか手が回らないためである。例えば、観光客が大勢来たとしても、民宿が受け入れられる人数には限りがある。また、尾瀬ブームの際の経済的な貯えがある人がほとんどであったため、新規客を積極的に取り入れ、民宿の規模を大きくしようとする人は少なかった。あくまで、民宿の経営は「生活の一部」であり、それを超えるような規模の大きい経営を望む人は居ないのである。また、現状の民宿も高齢化や人手不足などもあり、自転車操業で経営している所が多く、やはり規模を大きくすることに手が回らない状態だ。

最初に述べた、連泊を好まないという特徴も、他の宿に気を使っているというわけではなく、経営スタイル的に 1 日目以降の食事に変化をつけることが難しいためであるからだろう。民宿で出される食事は、それぞれの民宿で独自に研究され、檜枝岐村の特産を使って作られた郷土料理が多い。そのため、料理のレパートリーや使用する食材に限りがあるため、連泊になると民宿側にも負担がかかるのだ。民宿としても、経済的にはゆとりがあるところが多く、忙しくなることも好まないため、このような「競わない」スタイルになったということがわかった。

村に外部の企業が参入せず、内発的な発展がされてきた背景にも村の歴史がかかわって

いる。明治6年に制定された地租改正条例が村に大きな影響を与えたのである。昔から檜枝岐村の住民は、周辺の花々の資源を使い生活していたが、地租改正により村の面積のうち94パーセントもの土地が国有林となってしまったのだ。この影響で、林業を営んでいた人々は自由に山を使えなくなり、村全体が一気に貧しくなった。地租改正は村の人々にとって苦しい出来事であり、その時期から「村の土地を譲らない」という意識が強く残ってきたのだ。しかし、現在では村の利便性を上げるために、コンビニなどの参入を望む声もあるという。だが、山間部であることや豪雪地域であることなどから、企業も参入を見送ってしまう状態にある。生活のしやすさを考えると、村の利便性を上げることも課題の一つとなっている。

また、檜枝岐村は役場が村民にとって重要な存在となっている。檜枝岐村役場では、村民が生活していくうえでの困りごとや、不足している部分などを手厚くサポートしている。例えば、村に葬儀会社がないことから役場が火葬を引き受けているほか、個人の困りごとでも役場に相談しに来る人が多いそうだ。村民と役場の距離が非常に近く、信頼関係も厚いように感じた。一村一集落であり、役場の距離が近く、役場が主導となって村の運営を行っているため、共同性があるのである。

5. 考察

檜枝岐村に共同性・平等性が強く感じられるのは、役場が主体となって観光業や村の運営を行っているからであると考えた。村の歴史や環境が影響し、一斉に役場主導で観光化を進めてきたことや、厳しい環境を協力して乗り越えてきたことなどから、村を一つの共同体だと考える意識が強く、村のことは村でやるという考え方が続いてきたのではないだろうか。また、他の観光地との大きな違いの一つに、観光業が日常生活の中に組み込まれていることがあげられる。多くの観光地が、企業が利益を出すために観光業を始めたのに対して、檜枝岐村では、生活をするための手段の一つとして観光業がある。この差が、オーバーツーリズムを防ぎ、コロナ下での影響を少なくしたのではないだろうか。

役場と村民の関係性が、この村の観光の在り方を作り上げてきた大きな要因である。住民が一つの共同体の意識をもって地域の発展に関わるのが地域づくりにとって重要なポイントとなるのではないかと考えた。(3174文字)